

語彙の量と質の充実を図る低学年国語科学習指導の工夫

— 表現の工夫を促す物語創作の単元づくりを通して —

三原市立本郷西小学校 白坂 里奈

研究の要約

本研究は、語彙の量と質の充実を図る低学年国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、充実を図る語彙を「理解語彙」「表現準備語彙」「表現語彙」の三つに分類し、語彙の量を「理解語彙及び表現語彙の量」とし、語彙の質を「語句のまとまりや語句相互の関係を理解することで語句の意味や使い方に対する認識が深まるもの」とした。この、語彙の量を増やすことと語彙の質を高めることは、言語習得の両輪であり、一体的に行う必要があることが分かった。そこで、語彙の量と質の充実を一体的に図るべく、物語創作の単元づくりを行った。物語創作の過程において、児童に表現の工夫を促すために、言葉集めや語句の仲間分け・関係付けの方法を工夫したり、指導者が語句に着目させる働きかけを行ったりするようにした。研究授業の結果、多くの児童は、理解語彙を集め、表現準備語彙を掘り起こし、それらの質を高め、表現語彙の量を増やすことができた。このことから、表現の工夫を促す物語創作の単元は、低学年の児童が語彙の量と質を充実させることに有効であると分かった。

I はじめに

「中央教育審議会答申」（平成28年）において、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあり、小学校低学年の段階から、語彙を増やすことや語彙を生活の中で活用できるようにすることなどの重要性が指摘されている⁽¹⁾。また、これからの子供たちには、思考力・判断力・表現力等の一つの側面の力としての、自分の感情をコントロールすることにつながる「感情や想像を言葉にする力」が必要であるともされている⁽²⁾。これらの語彙の量と質に関する課題や求められる力を受け、小学校学習指導要領（平成29年告示）では、国語科において、語彙に関する指導事項が新設された。

その指導事項については、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（平成30年、以下「29解説」とする。）に、「語彙を豊かにするとは、自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。」¹⁾と示されており、語彙の量と質の両面から充実を図ることが求められている。

語彙に関する児童の実態について、角田安代（平成31年）は、平成30年度の東京都教職員研修センターでの研究において、約9割の教員が児童の語彙の量に課題を感じているというアンケート結果を示している⁽³⁾。

自身の作文指導を振り返っても、体験したことな

どを文章で表現することはできているが、したことや見たことの羅列のみで終わっていて様子が伝わりにくい文章や、自分の感情を「楽しかった」「うれしかった」という平易な語句ばかりでまとめる傾向が、学年に関係なく多く見られた。

実際に、所属校第2学年の児童の日記（27人の5日分）を調査したところ、感情を表す語句は、163回（一人当たり平均7回）使われていたが、特定の語句に偏りが見られた。その内訳を、表1に示す。

表1 児童の日記に見られた感情を表す語句とその出現率

感情を表す語句	回数・人数 (回・人)	出現率 (%)
うれしかった	66・20	40
～したい(打ちたい、遊びたいなど)	29・14	18
よかった	12・5	7
楽しかった	10・7	6
がんばろう、がんばりたい	8・3	5
むずかしい	5・3	3
おもしろかった	4・1	2
びっくり	3・3	2
はずかしい	2・2	1
その他(さんねん、どきどきなど)	24語各1回	15

教師に見せる日記という特性上、嬉しかったことが題材の中心となり、このような結果になったとも考えられるが、全体（163回）の40%の文章が「うれしかった」を使ってまとめられている上、一人の児童が使う語句の種類は少なく、どの題材を扱った内容でも「うれしかった」と同じ感情を表す語句で

まとめられている傾向があった。

また、様子を表す語句については、栗のとげは「先がするどい」やお風呂に長く入っていて手が「しわしわになった」など詳しく表現しているものも見られたが、数人の児童にとどまり、多くの児童の日記には、様子を詳しく表す語句が見られなかった。

このように、児童の書く文章において、感情や様子を表す語句の使用が乏しいという実態がある。

語彙指導全般に関わる先行研究としては、例えば、辞書の利用や読書活動による語彙指導や国語科の授業における語彙の取り立て指導、読むことと書くこととを関連付けた理解・表現学習の中での指導などが行われてきている。

一方で、語彙指導の問題について、井上一郎（2013）は、「学校全体での語彙指導研究の成果は、ほとんど見られない。」²⁾、「研究・実践研究が一般的に少なく、学校での取り組みのなさが目立つ。」²⁾と指摘しており、実践を伴った研究が十分でないと考えられる。

以上のことから、語彙の量と質の充実に関わる課題は、低学年の段階から実践的な研究を行う必要があると考え、本研究に取り組むこととした。

II 低学年における語句の範囲について

「29解説」において、語彙を豊かにすることに関する事項に、指導する語句の範囲が示されている。それを具体例とともに表2に示す。

表2 各学年において指導する語句の範囲^{3) (4)}

	第1学年・第2学年	第3学年・第4学年	第5学年・第6学年
「29解説」の範囲	身近なことを表す語句 日常生活や学校生活で用いる言葉、周りの人について表す言葉、事物や体験したことを表す言葉	様子や行動、気持ちや性格を表す語句 事柄や人物などの様子や特徴を表す語句、人物などの行動や気持ち、性格を表す語句	思考に関わる語句
具体的な語句の例	さかな、ピンク、せんせい、遊ぶ、うれしい、たのしい、びっくり、うきうき、くやし、どきどき、ぼろっと、すたすた、ばくばくなど	ほほえむ、もじもじする、ごつごつ、にぎやか、あざやか、すがすがしい、しんみり、なごやか、じれったい、けんきょ、ほがらか、心が晴れる など	しかし、要するに、考える、だろう、「～は～より…」、「～は～に比べて…」、「～が～すると…」、「～になった原因を考えてみると…」など

表2にあるように、実際に教科用図書（全4者）で使われている語句を分析すると、例えば、中学年に相当する「事柄の様子や人物の気持ちの語句」である「すたすた」「うれしい」も低学年の教科用図書で取り上げられている。これは、体験した時の様子やその時の気持ちを表す身近な言葉として取り上

げられていると考えられる。つまり、低・中・高学年ごとに示されている語句のまとまりには、それぞれ重なる部分があると言える。また、「29解説」には、示している範囲について、あくまでも指導の重点とする語句の目安であり、これ以外の語句の指導を妨げるものではないとも示されている⁽⁵⁾。

以上のことから、本研究における語句の範囲は、身近なことを表す語句を中心とすることとした。

III 語彙の量と質の充実について

1 語彙の量の充実について

(1) 使い手から見た語彙の分類

「29解説」において、語彙の量に関して、「意味を理解している語句の数を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やす」⁴⁾ことが示されており、語句の使い手となる児童が、意味を理解している語句と話や文章の中で使いこなせる語句の量を増やすことが求められていると言える。

使い手から見た語彙を、森山卓郎（2019）は、五つに分類している⁽⁶⁾。それぞれの関係を図示すると、図1のようになる。

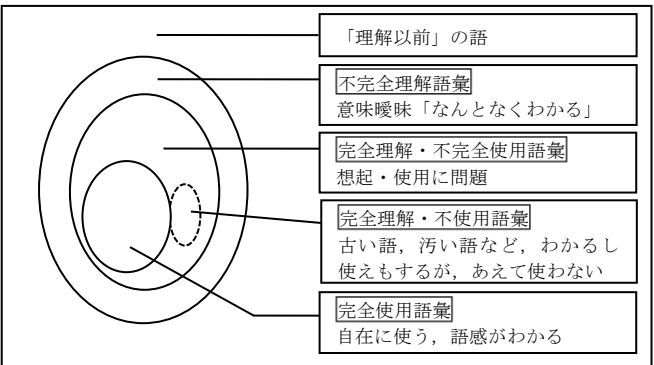


図1 森山（2019）による語彙の分類（図は稿者）

また、達富洋二（2019）の場合は、四つに分類している⁽⁷⁾。それぞれの関係を、図2に示す。

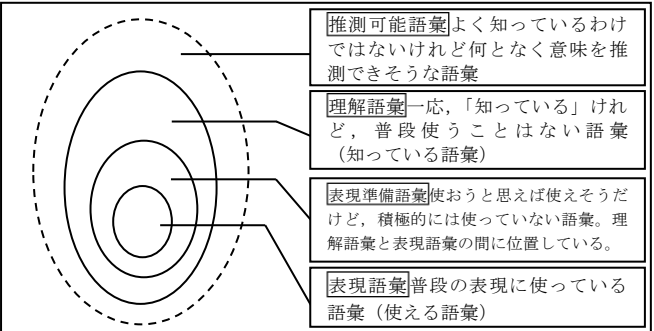


図2 達富（2019）による語彙の分類（図は稿者）

森山と達富の分類を基に、低学年では、「不完全理解語彙」や「推測可能語彙」は、さほど多く出合わないと考えられることを踏まえ、本研究において充実を図る語彙を、表3の三つに設定する。

表3 森山と達富と本研究の語彙の分類の対応

森山	達富	本研究	
理解以前の語			
不完全理解語彙	推測可能語彙		
完全理解・ 不完全使用語彙	理解語彙	理解語彙	意味が分かる語彙
	表現準備語彙	表現準備語彙	意味は分かり、使い方もある程度分かるが、文章の中で積極的に使っていない語彙
完全理解・ 不使用語彙			
完全使用語彙	表現語彙	表現語彙	表現したいことに合わせて文章の中で自在に使える語彙

(2) 語彙の量の充実とは

語彙の学習について、達富（2019）は、理解語彙の量を増やすことも大事だが、理解語彙を表現準備語彙や表現語彙にしていくことも必要であると述べている⁽⁸⁾。

(1)(2)を基に、本研究において、語彙の量が充実するとは、理解語彙及び表現語彙の量が増え、語彙の量全体も増えている状態になることとする。それを図3に示す。

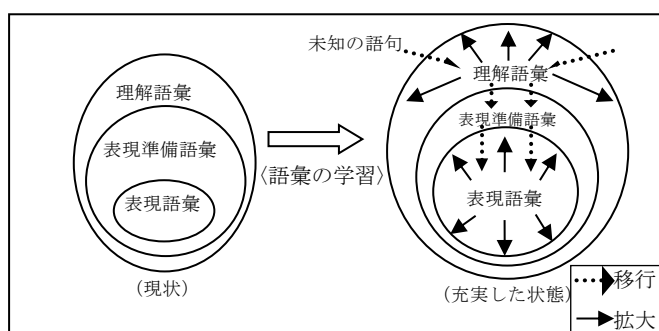


図3 語彙の量が充実した状態

語彙の学習を通して、未知の語句が理解語彙に含まれ、理解語彙が表現準備語彙に、表現準備語彙が表現語彙に移行していく。それにより、語彙の量全体が大きくなり、特に、その中に占める表現語彙の割合が大きくなっていくという状態である。

2 語彙の質の充実について

(1) 語彙の質とは

「29解説」において、「語彙の質」に関する明確な定義はないが、語彙を豊かにすることに関して、

「語句の量を増すことと、語句のまとまりや関係、構成や変化について理解することの二つの内容で構成している。」⁵⁾と示されていることから、語句のまとまりや関係、構成や変化について理解することが語彙の質に関することであると捉えられる。

語句のまとまりや関係、構成や変化について理解することについては、「29解説」に学年ごとに次のように示されている。表4に示す。

表4 語句のまとまりや関係、構成や変化についての記載⁶⁾

第1学年・第2学年	第3学年・第4学年	第5学年・第6学年
意味による語句のまとまりがあることに気付くこと	性質や役割による語句のまとまりがあることを理解すること	・語句の構成や変化について理解すること ・語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと

表4から、語句の構成や変化は、高学年で扱うとされ、低学年では、語句のまとまりや関係を理解することに重点が置かれていることが分かる。

語句のまとまりや関係とは、語句の意味による分類や語句相互の関係である。例えば、「どうぶつ」「くま」「きつね」はものの名前を表す語句のまとまりに分類できる。また、それぞれに具体と抽象の関係も見える。「大きい」「小さい」は大きさを表す語句のまとまりに分類でき、反対の意味を表す語句であるという語句相互の関係も見える。また、「おどろく」と「びっくり」は気持ちを表す語句のまとまりに分類でき、似た意味を表す語句であるという語句相互の関係も見えるということである。(図4)

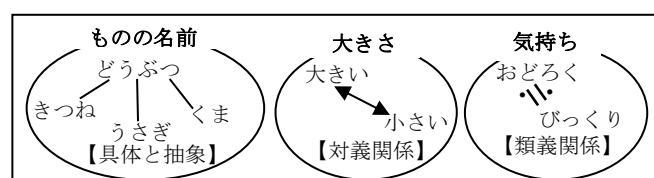


図4 低学年における語句のまとまりや関係(例)

以上により、低学年における語彙の質を、語句のまとまりや語句相互の関係を理解することで語句の意味や使い方に対する認識が深まるものとする。

(2) 語彙の質の充実とは

語句のまとまりや語句相互の関係を理解することで、自分がもっている、ばらばらに存在している語句を、意味によるまとまりで分類したり(カテゴリー化)、類義関係や対義関係などの語句と語句との関係を理解したり(ネットワーク化)することができ、語句の意味や使い方に対する認識が深まり、緻密になっていく。その状態になることを、本研究では、語彙の質の充実とする。

語彙の学習を通して質の充実を図ることにより、語句の意味や場面に応じた使い分けなどがよく理解でき、これまで意味は何となく分かる語句、意味は分かるが自分の表現では使っていなかった語句を自

分が表現したいことに合わせて文章の中で自在に使えるようになることを考える。

1, 2を踏まえ、語彙の量と質が充実した状態を図式化したものが図5である。

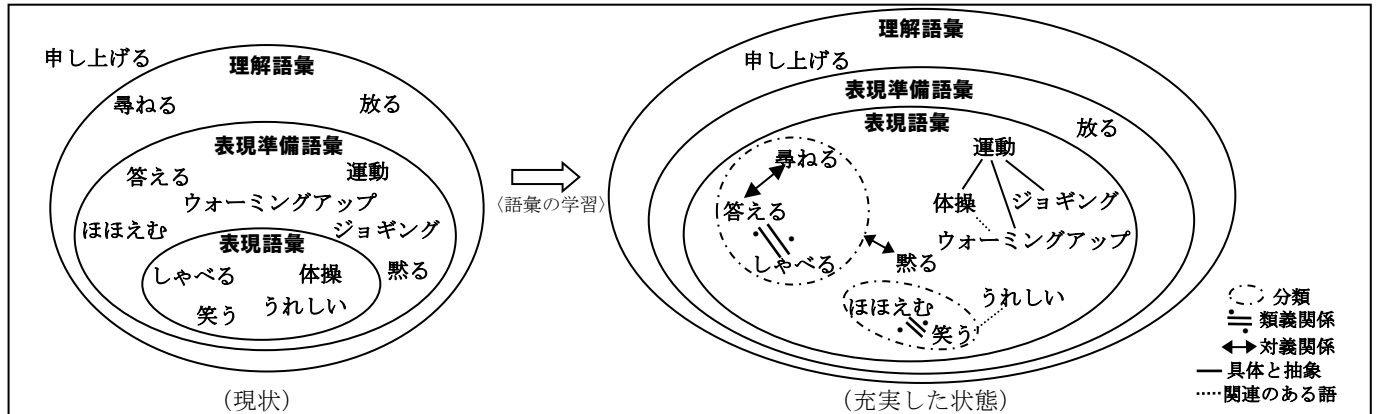


図5 語彙の量と質の充実が図られる前と後の状態のイメージ図（語句は例）

3 語彙の量と質の関係

語彙の量と質の関係について、鈴木一史（2020）は、読書指導の図書の出量を競う量の問題と一冊の本を何度も読み聞かせ、その読書体験により、感情を形成し言葉の感覚を涵養する質の問題を例に挙げ⁽⁹⁾、「量と質の問題は、どちらが先でどちらが後というわけではなく、言語習得の両輪として機能し、切り離せない。」⁷⁾と述べている。

また、大崎友子（令和2年）は、「質を高める中で、語句と語句との関係、構成や変化について理解していくのであり、語彙の質を高めていくと同時に語句の量も増していくという相互に関わり合う関係があるといえる。」⁸⁾と述べている。

これらのことから、語彙の量と質の充実を図ることは、一体的に行うことが必要であると考えられる。

IV 語彙の量と質の充実を図る手立てについて

国語科教育全体の中で語彙指導の実践的研究は少ないながらも、最近10年間の国語教育関連の雑誌で取り上げられているもの（小・中学校）を見ると、読書や読み聞かせ、辞書の活用、言葉集め、読むことと関連させた指導などを通して、理解語彙の量を増やす実践が最も多く見られた。

他にも、知っている語句を使って、短文や日記を書く実践や、語句を調べて、詩や俳句、短歌の創作をするような表現に重きを置いた実践がある。語彙の質を高めるための実践は、集めた語句の仲間分けをしたり、語句と語句の関係を整理したりするなどの語句の取り立て指導がある。

語彙の指導に当たっては、「29解説」において、いろいろな表現を使うようにすることと一体的に行うことの有効性が示されている⁽¹⁰⁾。

また、表現語彙を増やすことについて、達富（2019）は、表現準備語彙を文脈に合わせて何度も使うことで表現語彙になると述べている⁽¹¹⁾。理解語彙そのものを増やすだけではなく、語句の分類や関係付けなどによって語彙の質を充実させることで、表現準備語彙を文脈に合わせて使うことができるようになることを考える。

これらのことから、語彙の量と質の充実を図るためには、諸先行実践において目指されていた、理解語彙を増やす、語彙の質を高める、表現語彙を増やすことを一体的に行う必要があると言え、それは、語句を集めたり、吟味したりして多様な表現をすることができ、かつ、低学年でも取り組みやすい学習活動を通して指導することが重要であると考えられる。そこで、本研究では物語創作を取り上げる。

V 語彙の量と質の充実を図る物語創作について

1 物語創作の有用性

物語創作は、先行研究において、様々な有用性が述べられているが、本研究ではその中でも特に、多様な表現を使うことができること、学習活動に対する児童の関心・意欲が高いこと、書くことに対する抵抗が比較的少ないことの三点に着目する。

物語創作は、日記等に比べて、自分の経験にとどまらない多様な表現を引き出すことができる。多様

な表現を使うことにより、表現を選択・吟味する幅が広がり、より語彙の量と質の充実が図られると考える。また、物語創作が現実世界とは違う世界を対象としていることから、児童にとって楽しく取り組むことができ、書くことへの抵抗が少ない学習活動であると考えられる。

2 表現の工夫を促す物語創作の単元

児童が表現を工夫するための手立てを盛り込んだ物語創作の単元を、書くことの学習過程に沿って示したものが表5である。

本単元においては、語彙が不十分なモデル文の提示や動く様子を視覚化する動作化、対話、作品の共有、学習の振り返り、言葉集めや語句の仲間分け・関係付け、指導者のコメントなどを用いて、表現の工夫を促し、語彙の量と質の充実を図る。

Ⅵ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

低学年国語科の物語創作の単元において、表現の工夫を促す指導を工夫することによって、表現準備語彙の質が高まり、表現語彙の量が増え、語彙の量と質を充実させられるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表6に示す。

表6 検証の視点と方法

検証の視点		方法
1	表現の工夫を促す物語創作の単元は、語彙の量と質の充実を図ることに寄与したか。	・プレテスト ・ポストテスト ・プレワーク
2	表現の工夫を促す手立てには、どのような効果が見られたか。	・ポストワーク (プレのリライト) ・本単元において児童が作った物語
3	日常的に書く日記に語彙の量と質の向上が見られるか。	・日記 ・振り返り

表5 語彙の量と質の充実を図る物語創作の単元

書くことの学習過程		物語創作の学習活動	語彙の量と質の充実を図ることとの関連	表現の工夫を促す具体的な手立て	
題材の設定		・絵から想像したことを基に「様子や気持ちがよく分かるお話を作る」という学習課題を把握し、学習の見通しをもつ。 ・お話作りのポイント（会話文、様子や気持ちを表す言葉、5W1Hなど）を考える。	語彙への意識付け。	語彙が不十分なモデル文の提示 ：教師が作成した拙い表現で書かれた物語を読み、物語創作における表現の工夫の必要性に気付かせる。	
情報の収集、 内容の検討	考えの 形成	・場面の様子や登場人物がしたことや言ったことなどについて、絵から分かることや想像できることを話し合う。 ・絵を見てお話の展開を想像する。 ・登場人物のしたことや会話文など、自分が想像したことをメモする。 ・お話メモを基に動作化し、様子や気持ちを詳しくする言葉を考える。 ・出てきた語句の分類・関係付けをしたり、言葉集めをしたりする。	表現準備語彙に気付かせる。 語彙の質を高める。 語彙の質を高める。	動作化 ：登場人物がしたことや言ったことについて想像したことを動作化し、それを言語化する。 言葉集め ：様子や気持ちがよく伝わるように、お話で使うための語句を集める。 仲間分けや関係付け ：出てきた語句について仲間分け・関係付けをする。	
		・お話の展開が分かるように文章の順序を考える。	表現準備語彙への気付きを促す。	指導者のコメント ：表現の工夫を促すよう問いかけ、児童に語句を集め、言い換えたり、付け加えたりさせるきっかけを与える。	
記述		・自分の書きたいお話の場面の様子や登場人物の気持ちがよく分かるように気を付けて、お話を書く。	表現準備語彙への気付きを促す。 表現語彙を増やす。	指導者のコメント ：よりふさわしい語句を検討するよう問いかけ、児童に語句を集め、言い換えたり、付け加えたりさせるきっかけを与える。 文章の中で使う ：これまでに集めた語句を使って、自分が書きたいことがよく分かるようにお話を書く。	
		推敲	・自分のお話をもっと楽しいお話になるように表現の工夫を考えて、書き直す。	語彙の質を高めるための足がかり。 語彙の質を高める。 表現語彙を増やす。	音読 ：お話を声に出して読むことで、表現の工夫ができそうな部分に気付かせる。 対話 ：友だちや教師と「お話作りのポイント」に沿って対話をしながら、ふさわしさを確かめる。 文章の中で使う ：よりよい表現を工夫して書く。
共有			・友だちとお話を読み合い、表現の良いところやお話のおもしろいところを見つけ、伝え合う。	理解語彙を増やす。	作品の共有 ：友だちが書いた物語を読むことで、自分が知らなかった語句に出合う。
			振り返り	・本単元の学習が、活用できる場面を考え、本単元を振り返る。	その他の文章への活用を促す。

Ⅶ 研究授業について

研究授業の内容及び学習指導計画を表7に示す。

表7 研究授業の内容及び学習指導計画

期間	令和2年12月3日(木)～12月17日(木)	
対象	所属校第2学年(1組27名)	
単元名	世界にひとつだけの絵本を作って、学校の図書館に置いて、学校のみんなに読んでもらおう！	
教材	絵を見てお話を書こう(東京書籍 二上) (四つの場面のうち、あらかじめ描かれていない三つの場面を創作するもの。)	
単元の目標	様子や気持ちがよく伝わるように、詳しくする語句を入れるなど、表現を工夫して、簡単な物語を書くことができる。	
指導事項	知識及び技能 (1) オ 思考力、判断力、表現力等 B(1)エ	
次	時	学習活動
一	1	学習課題を設定し、学習計画を立てる。
二	2	場面①②について、場面の様子や人物の心情を想像し、様子や気持ちを表す語句を言い換えたり、付け加えたりして、よく伝わるように、お話を書く。
	3	
	4	
	5	場面③を想像し、お話の構想を立て、お話メモを作成する。
	6	
	7	場面③のお話を、よく伝わるように書く。
	8	場面③の様子や気持ちを表す語句に着目して、よく伝わるお話になっているか、推敲する。
	9	場面④について、場面の様子や人物の心情を想像し、様子や気持ちを表す語句を言い換えたり、付け加えたりして、よく伝わるように、お話を書く。
	10	場面①～④のお話を推敲しながら、絵本に書く。
	11	友だちと作品を共有し、感想を伝え合う。
三	12	単元の学習を振り返る。

Ⅷ 研究授業の分析と考察

1 視点1 表現の工夫を促す物語創作の単元は、語彙の量と質の充実を図ることに寄与したか

(1) プレテスト・ポストテストの結果

プレテスト・ポストテストは、同一の問題で、様子や気持ちを表す語句の類義語等をいくつか書くことができるかを問うた。プレテスト後に自己採点や解説等は行わず、単元終了後にポストテストを行った。テストの結果を表8に示す。

表8 プレテスト・ポストテストの結果(n=27)(人)

	増えていない	1～4語増えた	5～10語増えた	増加の計
①歩く	8	17	2	19
②食べる	7	15	5	20
③太陽	14	13	0	13
④嬉しい	18	9	0	9
⑤悔しい	24	3	0	3

表8に示すとおり、語句によりばらつきはあるものの、いずれも増加していた。語句の数が増加したのは、語句のカテゴリー化・ネットワーク化が進んだことによるものと考えられることから、語彙の量のみならず、語彙の質の充実も図られたことを示し

ているといえる。

①②の語句の数が特に増えた理由として、動作の様子を表す語句は、低学年の児童にとって身近な語句であり、日常的に体験していることが考えられる。また、「歩く」「食べる」は児童が本単元で創作した物語に出てきた語句であり、児童が単元の学習を想起して書くことができたとも考えられる。

一方、③④⑤は、これらに類する理解語彙が不足していたため、カテゴリー化・ネットワーク化が行えず、語句の数が増えなかったと考えられる。気持ちを表す語句の理解語彙が十分でない低学年の児童にとっては、困難な課題であったと言える。

(2) プレワーク・ポストワークの分析

プレ・ポストワークでは、絵から場面の様子を想像して物語を創作させ、様子や気持ちを表す語句を使って書くことができるかをみた。なお、ポストワークでは、プレワークで自分が考えた物語の語句を言い換えたり、語句や文章を付け加えたりさせた。

ポストワークで様子や気持ちを表す語句を言い換えたり、付け加えたりして物語を書いていた児童は、27人中23人であった。物語のストーリーを膨らませて、そこに様子や気持ちを表す語句を使っている児童もいたり、なかなかそうした語句を使えない児童もいたりしたが、学級総計では、様子を表す語句は47語、気持ちを表す語句は15語増えていた。

様子を表す語句には、「てくてく歩く」や「はつきり元気な声で言う」など、動作の様子を表す語句が多く見られた。気持ちを表す語句には、「喜んで」や「るるん気分」など、普段の日記では見られなかった語句が見られた。

個人差があったり、大幅な語句の増加は見られなかったりしたものの、8割以上の児童が様子や気持ちを表す語句を使って物語を書けていたり、普段の日記では見られなかった語句を使って書けていたりした。物語創作の単元が、様子や気持ちを表す語句を使ってよく伝わるように、文章を書くという目的意識を児童にもたせ、多様な表現を引き出すことに有効に働いたと言える。

また、ストーリーそのものを膨らませたり、会話を入れて場面の様子を詳しく表現しようとしたりしている児童も多く、プレワーク時に比べて物語創作を楽しんでいる様子が見られた。こうしたことも、多様な表現を試みようという意欲につながったと考えられる。

(3) 児童が物語創作において使用した語句の分析

児童が物語中で使っていた語句について、「本単

元の学習中に調べるなどして新しく知った語句か、元々知っていた語句だったのか」を口頭で質問した。すると、27人中25人の児童が、これまでの読書経験や、テレビ番組、大人との会話で元々知っていた語句であると回答した。

本単元において、多くの児童は、表現準備語彙を掘り起こし、表現語彙にしようとしていたと考えられる。

(4) 視点1のまとめ

(1)(2)(3)の結果から、表現の工夫を促す物語創作の単元は、低学年の児童が、語彙の量と質を充実させることに概ね寄与したと言える。特に、日常生活で使う語句や体験したことを表す語句については、創作の過程で手持ちの表現準備語彙をカテゴリー化、ネットワーク化させ、表現語彙としていったことがうかがえる。

2 視点2 表現の工夫を促す手立てには、どのような効果が見られたか

本単元において、特に効果が見られたと考えられる、①言葉集めや語句の仲間分け・関係付け、②指導者のコメントの2点について説明する。

(1) 言葉集めや語句の仲間分け・関係付け

語句の量を増やし、質を高めるために、言葉集めや語句の仲間分け・関係付けを行った。

ア 「ことばへんしんシート」の活用

言葉集めや語句の仲間分け・関係付けには、「ことばへんしんシート」というワークシート(図6、稿者作成)を活用した。「ことばへんしんシート」は、ある語句について、自分が知っている語句や本で調べた語句を「言い換えられる言葉」(換言)と「くつつく言葉」(修飾)に分けて、関係付けながら言葉集めをしていくものである。

「言い換えられる言葉」は、語句そのものを別の語句に置き換える必要があり、理解語彙が比較的少ない低学年の児童にとっ

ては、少し難しいようであった。それに比べて、「くつつく言葉」は、手持ちの語句から考えることができ、どんどん書き出す様子が見られた。「くつつく言葉」は、厳密には、図5に示した類義関係には当たらないものの、児童は、「大きな～」や

ことばへんしんシート		
言う		
言い換えられることば	くつつくことば	
しゃべる	つぶやく	大きな声で
話す	知らせる	すらすらと
答える		ぼそぼそと
さげぶ		はっきりと

図6 ことばへんしんシート

「はっきりと」などという、程度や状態を表す語句を「様子を表す語句のまとまり」としてカテゴリー化し、表現準備語彙を表現語彙にすることができていたと考えられる。このことは、語句のまとまりを、さらに精確なものにしていく萌芽となるものであり、今後、各学年段階に合わせて、理解語彙を増やしつつ、より表現語彙の精度を上げていくことが求められる。

イ 手持ちの語句を思い出させる

また、語句を集める方法についても、「自分が知っている言葉でも良い」としたことで、これまで知らなかった言葉を本などで新たに調べるだけではなく、自分が元々知っている語句を思い出そうとしている姿が見られた。

ア、イの手立てによって、低学年の児童でも言葉集めに取り組みやすくなり、その結果、表現準備語彙を掘り起こし、それらをカテゴリー化・ネットワーク化させ、表現語彙にすることにつながったと言える。

(2) 指導者のコメント

様子や心情を詳しくする部分に着目させ、語句を集め、言い換えたり、付け加えたりさせるため、児童が自分で考えた場面について、指導者が児童の作成したお話メモにコメントを書き込んで児童に返した。例としては、「言いました。」を多用している児童には「ほかの言い方はないかな。」とコメントを書き、「ことばへんしんシート」の活用を促した。他には、「橋を渡った。」と出来事のみを書いている児童には、様々な語彙を使ったり、検討したりさせるために、まずは、表現の工夫を促すコメントをした。「どんなふうに渡ったのかな。」「渡っているとき、くまさんときつねさんは、どんな気持ちだっただろう。」とコメントし、そこから、様子や心情を表す語句を引き出そうとした。

コメントを見て、児童は、「ことばへんしんシート」の活動をしたり、手持ちの語句で、様子や気持ちを表す語句を言い換えたり、付け加えたりして物語をよく伝わるように詳しく書こうとしていた。

低学年の児童は、自分で書いた文章を自分で推敲することが難しいため、指導者がコメントを書き込むことは、児童に様子や心情を詳しくする部分に着目させ、語句を集め、言い換えたり、付け加えたりさせることに有効に働いたと言える。

3 視点3 日常的に書く日記に語彙の量と質の

向上が見られるか

(1) 児童の振り返りの記述から分かること

単元終了後の児童の振り返りには、「今までに知らなかった言葉や今までに知っていた言葉がたくさん書けてよかった。」「日記も、知らなかった言葉も知っていた言葉もたくさん書きたい。」のような語句に着目した記述が多く見られ、物語創作の単元は、児童に「語句の言い換えや付け加えは、他の場面でも活用できる」ということを実感させる有効な手立てであったと言える。

(2) 児童の日記の分析

単元終了後に、日常的に書く日記に語彙の量と質の向上が見られるかを見るために、家庭で日記を書く課題を課した。

単元の学習で見られたような、語句の言い換えや付け加えをすることで、単元の学習前より、よく伝わるように、日記を書いていることを期待したが、単元の学習前に書いた日記とあまり変化が見られなかった。つまり、語句の言い換えや付け加えの有用性を実感していても、物語創作で学習したことがそのまま日記に活用できるわけではないと言える。

原因として、物語（創造・想像が中心）と日記（経験した事実が中心）という文種の性質上の違いや日記は家庭で書いたため、指導者のコメントを、その場で直接入れにくかったことが考えられる。

物語創作の単元において学習したことを日常的に書く日記などに生かすことができるようにするためには、ただ漫然と書かせるのではなく、「悔しかったことを書く」や「視点人物を変えて書く」など、多様な表現を使って書けるように工夫して日記を課したり、時には、一度書いた日記を読み返して、使っている語句を吟味し、よりふさわしい語句に換えてリライトさせたりするなどの指導の工夫が必要であると考えられる。

さらに、この語彙の量と質の充実は、6年間を通して反復的、系統的に取り組む必要があると言える。

IX 研究のまとめ

1 研究の成果

低学年における表現の工夫を促す物語創作の単元は、手持ちの表現準備語彙をカテゴリー化、ネットワーク化させ、表現語彙にしていけることができるという点で有効であり、語彙の量と質の充実に資することが明らかになった。

2 研究の課題

- 語彙の量と質の充実を図るためには、理解語彙を増やす指導を行い、手持ちの語句そのものを増やす必要がある。
- 国語科の他の単元や他教科、日常生活において書く文章にも語彙の量と質の向上が見られるよう、継続して指導を行っていく必要がある。
- 反復的、系統的に語彙の充実を図るために、語彙学習を中核とした年間指導計画や小学校6年間を見通した学校全体で取り組む指導計画を立案する必要がある。

【注】

- (1) 中央教育審議会（平成28年）：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』p. 86に詳しい。
- (2) 中央教育審議会（平成28年）：前掲載p. 125に詳しい。
- (3) 角田安代（平成31年）：「児童の語彙を豊かにする指導の工夫-書くことにおける語彙指導を通して-」東京都教職員研修センターp. (6) -① https://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/kenkyusei/h30/h30_k03.pdf（最終アクセス令和3年1月20日）
※70名の教員に児童の語彙の量に関するアンケートを実施したもの。
- (4) 第1学年から第4学年の例については、令和2年度版小学校国語教科用図書（東京書籍、光村図書、学校図書、教育出版）から採集した。
- (5) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』東洋館出版社p. 19に詳しい。
- (6) 森山卓郎（2019）：「新学習指導要領における語彙指導『活用的語彙力』をめざして」『教育科学 国語教育No. 830』明治図書出版pp. 10-11に詳しい。
- (7) 達富洋二（2019）：「語彙学習 理解語彙と表現語彙、そして表現準備語彙・語彙単元での語彙学習」『教育科学 国語教育No.836』明治図書出版p. 92に詳しい。
- (8) 達富洋二（2019）：前掲載p. 92に詳しい。
- (9) 鈴木一史（2020）：「『語彙力』との関連 文章読解と語彙指導の関連性」『教育科学 国語教育No.851』明治図書出版p. 29に詳しい。
- (10) 文部科学省（平成30年）：前掲載p. 47に詳しい。
- (11) 達富洋二（2019）：前掲載p. 94に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』東洋館出版社p. 8
- 2) 井上一郎（2013）：「理解学習・表現学習の中での指導の内容と方法」全国大学国語教育学会『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書p. 318
- 3) 文部科学省（平成30年）：前掲載p. 47, pp. 81-82, p. 119
- 4) 文部科学省（平成30年）：前掲載p. 8
- 5) 文部科学省（平成30年）：前掲載p. 19
- 6) 文部科学省（平成30年）：前掲載p. 19
- 7) 鈴木一史（2020）：「『語彙力』との関連 文章読解と語彙指導の関連性」『教育科学 国語教育No.851』明治図書出版p. 29
- 8) 大崎友子（令和2年）：「効果的に心情を表現する力を育てる国語科学習指導の工夫-読むことと書くこととをICTを活用して関連させる学習を通して-」広島県立教育センターp. 4 http://www.hiroshima-c.ed.jp/pdf/research/chouken/R02_zenki/kou02.pdf（最終アクセス令和3年1月20日）